

## 主 題：キリストの十分性を脅かす偽りの教え②

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章18－19節

## テーマ：“キリストの十分性”を惑わせる偽りの教えはどんなものだったか？

今朝も続けて皆さんと学んでいくのは、コロサイ人への手紙2章のみことばです。前回の続き、特に2：18－19を見てみたいと思います。先週からの流れを思い出すためにもいま一度16－23節をお読みしますので、それぞれよく神様のことばに耳を傾けてください。

コロサイ2：16－23

「16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。17 これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのよう、21 「すぎるな。味わうな。さわるな」というような定めに縛られるのですか。22 そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。23 そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」

さて、先週から私たちは「キリストの十分性を脅かす偽りの教え」について学び始めました。教会に入り込んでいた「偽りの教え」というものが、いかに危険で人々に混乱をもたらすものであったのかを考えたわけです。ここで少し皆さんに質問です。皆さん自身はそういった偽りの教えの危険性というものについて、普段の生活の中で考えを巡せることはあるでしょうか？正直あまりないかもしれません。聖書を読んでいて、にせ教師の存在や、いろいろなまちがった教えに関することばを目にしたとしても、今の私には関係ないとあまり関心を払わないかもしれませんし、何か複雑で私には難しいと思っっているかもしれません。でも、そんな方もぜひ覚えておいてください。二千年にもわたる教会の歴史というのは、常に偽りの教師との戦いでもあったということです。初代教会の時代から少し振り返れば、1世紀には、「イエス・キリストを信じる信仰だけでは神様の前には義とは認められない。救いはモーセの律法という行いが必要だ。」と唱えるユダヤの教師たちが存在していました。続く2世紀には、キリストが完全な人としてこの地上に来られたということを否定する“グノーシス主義”というものが登場し、4世紀には、キリストが完全な神様であることを攻撃して三位一体を否定する“アリウス派”というものが登場し、そして5世紀には、救いにおける神様の恵みの優位性や十分性を攻撃する“ペラギウス主義”というものも現れました。「なんだ、そのカタカナたちは？」「どれも聞いたことがない。」と言われるかもしれませんが…。でも気づいてほしいのは、教会が誕生してからたった数百年のうちに、このような偽りの教えが絶え間なく生まれ続けていて、そして絶えず教会を悩ませ続けていたということです。

このような教えを説いている人たちは、真っ向からキリストの教えに反対するような者ではありません。「自分たちもキリストの信者だ」と公言して、真理に少しの嘘を混ぜ合わせて働いていました。そんなにせ教師の働きは、確かにどの時代においても活発に起こっていました。だから、神様のことばである聖書には、そんなにせ教師とその教えに対する警告や忠告があふれているわけです。イエス様も弟

子たちに言われていました。「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」マタイ7：15にあります。パウロも、自分が去った後に迫っている危険を、このように口にしていました。使徒20：29-30「29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」イエス様やパウロだけでなく、ヨハネもこんなふうに明白に語っていました。Iヨハネ4：1「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。」と。

ちょっと考えてみてください。この当時、教会を巧みにだまそうとしていた数多くの偽りの教えというものは、今のこの時代になって数を減らしたと思います？そんな事はありません。真理を装った嘘というのは、ますます巧妙になって、ますますいろいろなところにあふれているのです。そんな偽りは、私たちの周りにたくさんあります。では、そんな偽りにだまされないためにどうしたらよいのか？まずは、敵の姿を正しく知ることです。いつも変わらないみことばは、偽りの教え、その敵についても変わらない知恵と助けをもって、私たちに理解を与えようとしてくれています。今、私たちが見ようとしているコロサイ2：16-23もその一つです。ですからいま一度、ぜひ自分のこととしてきょうのみことばと一緒に考えてみましょう。このみことばを通して私たちが、何が真理で、何が偽りなのかをよく吟味する者として、それだけではなくて、何よりもその偽りの教えが否定しようとしたキリストの十分性や、キリストの偉大さを正しく知って、そのキリストをますます愛する者として成長できるように。ぜひ皆さん、このみことばを通して考えてみてください。その助けになることを心から祈っています。

### ○十分性を脅かす偽りの教え：三つの危険な教え

#### 1. 律法主義 16-17節

では、早速みことばを見ていきましょう。前回私たちは16-17節を通して、教会に入り込んでいた危険な教えの一つ目「律法主義」を考えました。今回は二つ目となる教えを見ていきたいと思えます。

#### 2. 神秘主義 18-19節

二つ目に教会に入り込んでいた危険な教え、それは「神秘主義」と呼ばれるものでした。にせ教師たちは、十分なキリストでは満足せず、そのキリストに神秘主義を付け加えて人々を惑わそうとしていたのです。先週見た律法主義もあまり聞きなじみのないものだったかもしれませんが、今回この神秘主義と聞いて、ますます一体何のことだ？と思われている方もあるでしょう。いや、これこそ私には関係ない、あの当時の問題でしょ？と早速決めつけようとしているかもしれません。でも皆さん、この偽りの脅威も今の私たちの周りに変わらず存在しています。だからこそ、みことばを通して「神秘主義」というのがそもそも一体何なのか、どうしてそれが危険なのか、そしてその危険からどうすれば私たちは身を守ることができるのか、を考えてみましょう。この18-19節を通して、パウロは特に危険な神秘主義への警告、危険な神秘主義の特徴、そして危険な神秘主義への応答、と三つのことを教えてくれました。順に見ていきましょう。

#### ●危険な神秘主義：

##### 1) 危険な神秘主義への警告

「ほうびをだまし取られてはなりません。」〔2017年版「あなたがたを断罪することがあってはなりません」〕（「～に反して」カタ+「審判のようにふるまう」ブラビューオ）

まず一つ目は「危険な神秘主義への警告」です。パウロはこの偽りの教えに関して、兄弟姉妹に厳しい警告を与えていました。18節にこのように言われていました。「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。」この「ほうびを

だまし取られてはなりません」ということばは、とても興味深いことばで、新約聖書においてたった1回この箇所には出てきません。おそらく2017年版の聖書を持っておられる方は、今?となっているかもしれません。というのもこの同じことばが2017年版の方では、「あなたがたを断罪することがあってはなりません。」と訳されているのです。「ほうびをだまし取られてはなりません」というのと「断罪することがあってはならない」というのでは、ちょっと印象が違いますね。このことばは、そもそもどんな意味を持っているのでしょうか?

この「ほうびをだまし取られてはなりません」ということばは、もともと「審判のようにふるまう」を意味するギリシャ語「ブラビューオ」と、その頭に「～に反して」という否定を意味する「カタ」がくっついて成り立ったことばです。そしてここから訳すと、「審判として不公平なジャッジをすること」「不利な判定を下して、賞、ほうびを奪うこと」またもう少し一般的に「だれかをさばくこと」「断罪すること」といったさまざまな意味でも用いられています。これまでに皆さんも一度は経験したことがあるのではないかと思います。皆さんがスポーツをしていたり、テレビで何かの試合を観戦していて、審判の判定に納得ができずに腹を立てたりすること、ありません?「だれがどう見てもセーフでしょう!」とテレビに向かってひとり叫んでいる、そんな阪神ファンもこの中におられるかもしれません。当たり前のことですが、審判がまちがった判定を下せば、大きな結果をもたらすこととなります。一つの誤審が順位を大きく下げることに繋がったり、大きな大会において賞を失ってしまうということにつながることもあるのです。また、万が一その判定が公平なものではなくて、その審判の勝手な基準や判断に基づくものであるなら、後になって大問題になることもあるのです。

ここでパウロが「ほうびをだまし取られてはなりません」と口にしたとき、彼が言わんとしたことも同じでした。彼は、にせ教師たちがまるで審判のようにふるまって、コロサイの兄弟姉妹を勝手にさばこうとしているその事実には大きな懸念を覚えていました。神秘主義を教えているそのにせ教師たちは、人々をいろんなふうにだまそうとしていたのです。「あなたがたは、キリストだけで十分だと信じていますね。でも、それはまちがいです。キリストに神秘主義を加えていないようなそんなあなたは、信仰者としてアウトです!その歩みは失格です!私たちのように、キリストに加えて神秘主義の教えを求めなさい。」と。そんな危険な惑わしが教会のうちに起こっていました。残念ながら、キリストだけではすべてではないと何度も何度も非難されていけば、当然、自分の持っている信仰に混乱や不安を覚える者もいたでしょう。だからこそパウロは、「そんな偽りの教師たちに勝手な判定を下されてはいけません。彼らの勝手な基準に基づく誤審にだまされてはいけません。そんな誤審によって真理から離れてはいけません。」と厳しく注意していたのです。これが危険な神秘主義への警告でした。

## 2) 危険な神秘主義の特徴

続けて二つ目です。パウロは次に「危険な神秘主義の特徴」に関して教えてくれていました。神秘主義者が実際に何を信じていて、何を信じていて、そしてどんな教えで信仰者たちを惑わそうとしていたのかが描かれています。もう一度18-19節をよく見てみると、こう書いていました。「:18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、:19 かしらに堅く結びつくことをしません。」神秘主義について、この箇所ですべての特徴が挙げられていました。これから一つずつ詳しく考えてみたいと思いますが、その前に皆さん、この教えの大きな全体像を頭に入れておいてください。ここまで「神秘主義」と繰り返してきましたが、そもそもこれはいったい何なのか?ある註解者は次のように説明しています。「神秘主義とは、日常生活の主観的な体験を通して、個人が神と即座に接触できるという教えである。」またジョン・マッカーサー先生もこのようにまとめておられます。「神秘主義とは、神や究極の現実についての直接的な知識は、歴史的事実や客観的な神の啓示とは別の、あるいはそれに反する、個人的で主観的な直感や経験を通して達成されるという考え方です。」

と。難しいなと思った方、ポイントはこういうことです。「神秘主義」というものは、客観的な事実よりも、自分自身の主観的な感情や直感や経験や体験を重視するということです。神秘主義者にとって、救いも、霊的な成長も、自分自身の感覚や体験によってもたらされるものだと思っています。そしてそれを信じているがゆえに、日々何かしら不思議な体験を味わうことを熱心に求めているのです。ちょっと勘違いしてほしくないのは、感情や経験というものの自体がまちがっているではありません。真の信仰者も神様にあって喜びや平安を覚えたり、神様がなさる信じられないようなみわざを実際に味わうことも、もちろんあります。でも同時に、真の信仰者はそういった主観的な経験とか体験を追求することに重きを置くのではなくて、客観的なみことばの真理をいつも追い求めようとするのです。自分自身がどのように感じるのかではありません。決して変わることはない神様のことばを読んで、それを学んで、それを知って、そしてそれを生きていくことで、キリストに似た者へと変えられていくとことを熱心に求めていくのです。神秘主義者はその点において大きくまちがっていました。そしてパウロは、そんな彼らがどんな主観的な自分よがりの体験を喜びとしてとりこになっていたのか、捕らわれていたのかを、さらに具体的にこの18-19節で教えてくれているのです。

#### a) ことさらに自己卑下をする 18a節

五つ特徴があります。まず一つ目の特徴が18節の初めに出てきました。「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり」と。「ことさらに自己卑下をする」それが一つ目の特徴でした。ここで用いられていた「ことさらに自己卑下をする」ということば、実を言うとこのことば自体は「謙遜」とか「へりくだり」といった肯定的な意味で聖書の中で使われてもいます。例えばピリピ2:3を見てみると、このように書いています。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」この「へりくだって」は同じことばが使われていました。また今私たちが見ている同じコロサイの中の3:12でもこんなふうに使われていました。「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。」と。ここで「謙遜」と訳されていることばが同じことばでした。では、果たしてこのにせ教師たちは、実際に謙遜な者として歩んでいたのでしょうか？もちろんこれから見てもよくわかりますが、そうではありませんでした。彼らは、見せかけは謙遜な者としてふるまっていたでしょう。そう思いませんか？なぜなら、はっきりと私たちの目の前で偉そうにしている人がいたとしたら、そのような人にはだれもだまされないでしょう。偉そうな人が「いやいや、聞きなさい。」と言っていたら、私たちは自然に「いやそんなこと聞きたくありません。」となります。このような神秘主義者は、人前では、見かけは、へりくだった者でした。でも、彼らの内側は、高慢さやプライドにあふれていたのです。だから日本語の聖書はあえて「ことさらに自己卑下をする」と訳していました。「ことさらに」言い換えれば、「わざと」「故意に」彼らは自分自身を低く見せようとしていた、ということです。わざととしていたのです。ですから皆さん、彼らは本当に価値のある心の謙遜さではなくて、見せかけの謙遜さを追い求めていました。そんな偽りの謙遜が、神秘主義の持っていた一つ目の特徴でした。でもそんな偽りの謙遜よりもさらに深刻な問題を、この教えは抱えていました。

#### b) 御使い礼拝をしようとする 18b節

それが二つ目18節の続きに登場しています。「御使い礼拝をしようとする者に」と。二つ目の特徴は「御使い礼拝をしようとする」ということです。それが彼らの特徴でした。偽りの謙遜を身にまとっていた神秘主義者たちは、創造主である神様ではなくて、被造物である天使を熱心に拝んでいた、というわけです。あまりご存じない方もあるかもしれませんが、この「御使い礼拝」というのは、コロサイの町があった地域において何世紀にもわたって問題となっていたものでもありました。例えばコロサイの隣町であったラオデキヤという場所で、紀元後363年に開かれた公会議では、この御使い礼拝の問題に関して、こんな宣言がなされていました。よく聞いてください。「クリスチャンは神の教会を捨て

て、天使に祈ったり、集会を開いたりしてはならない。」また、かつてテオドレトスという神学者も、こんなことを口にしていました。「聖パウロが非難したこの病（御使い礼拝）はフルギヤとピシデヤで長い間続いた。」フルギヤとピシデヤもコロサイのその辺りの地域を指しています。ですから、この御使い礼拝というものは、長い間この地域の人々に大きな影を落とし続けていたということです。

そして言うまでもなく、この御使い礼拝は、大きな罪でした。聖書ははっきりとそのことを教えています。思い出してみてください。サタンの誘惑を受けたイエス様も、そのサタンに対してこう言われていました。マタイ4：10に「イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。」と。また黙示録の中にあつて、御使いの前にひざまずいて拝もうとしていたヨハネに対して、御使いがはっきりと言っていました。黙示録19：10にこう書いています。

「そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。」と。こうして御使いを礼拝するということは、イエス様もまた天使自身も禁じていることでした。被造物はただ創造主をほめたたえるべきでした。しもべはただ主人を賛美するべきでした。その逆はあり得なかったのです。造り主である神様だけが、すべてのものから礼拝を受けるにふさわしい存在でした。私たちひとりひとりもこの創造主である神様に向かって賛美をささげるのです。でもにせ教師たちは違いました。彼らは人々の目をそんな神様から奪おうと熱心に働いていたのです。真の神様ではなくて、被造物である御使いを礼拝することを熱心に追い求めていたことこそが、神秘主義の持っていた二つ目の特徴でした。

#### c) 幻を見たことに安住する 18c節

続けて三つ目の特徴が18節の続きにこのように書いていました。「ほうびをだまし取られてはなりません。」の後「彼らは幻を見たことに安住して」と。三つ目の特徴、それは「幻を見たことに安住する」ということです。それが彼らの特徴でした。ここで用いられていた「安住する」ということばには、もともと「何かを厳密に調査する」とか「何かにのめり込む」といった意味が含まれています。つまりにせ教師たちは、自分たちの見た幻、自分たちが経験した超自然的な体験、そういった自分の経験にのめり込んでいった、ということです。深くとらわれていた、ということです。またもつと言うなら、彼らは自分たちが見たその幻を通して得た知識を、ただ自分だけが誇りに思っただけではありません。彼らは自分たちが見たそれと同じものを見ていないような人達を見下していました。彼らは「自分はこんな幻を見ました。私はこんなすごい体験をしました。あなたはそんな体験をしていないのですね。あなたは失格です。私たちは新しい特別な教えを授かりました。あなたはそれ知らないのですね。それはまちがっています。」と謳っていたのです。これは当然大きな問題でした。何が問題だったのか？それは彼らが客観的な真理よりも、自分の主観的な経験や感情を何よりも重視していた、ということでした。これが問題でした。客観的な真理よりも、自分自身が味わった主観的な経験とか感情を振りかざしていたのです。何よりも重視していたのです。神様がはっきりと示されているのみことばの知識は横に置いて、それよりも、自分たちが見た幻や、いろんな体験を通して見たその知識に重きをおいていました。別のことばで言うなら、このようなことを信じている者たちにとって、みことばは十分で権威あるものではなかった、ということです。みことばでは十分でないから、彼らは自分たちの感情や経験や体験に重きをおいていました。でも、私たちは目の前にある、この手にしている聖書の全てが、神様の完全で十分な権威ある啓示であるということを知っています。Ⅱテモテ3章を通してはっきりと記されているその真理を信じているのです。はっきりと言われていました。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と。知恵ある神様は、もうすでに私たちに必要な救いも、いのちも、すべての良い働きにふさわしいものとなっていくためのその知恵も、力も、そのすべてをみこと

ばを通して私たちに与えてくださいました。このみことばこそ、権威ある十分なものでした。このみことばを通して、神様は今も私たちひとりひとりに語り続けてくださっているのです。みことば以外の新しい何かしらの啓示や教えというものは必要ではないのです。

でも、神秘主義者はそうは信じていません。彼らは、みことばは不十分だと思っています。彼らは、神様はみことばに加えて、こんなことを私に語ってくれた、神様はこんなことを私に教えてくれたと言って、自分の経験や体験や感情をみことばよりも重んじるわけです。

そして残念ながら、この誤った考え方というのは、この当時だけではなくて、歴史において何度も何度も繰り返され続けています。私たちの周りにもあるのです。私たちがいろんな異端を見れば、そこにこの教えが入り込んでいることをよく見ます。例えば、私たちの周りにあるモルモン教もその一つです。名前ぐらい皆さん聞いたことがあると思いますが、ジョセフ・スミスという人物によって創始されたこのモルモン教。その始まりは知っています？その概要がこんなふうにホームページに載っていました。「1820年の春、ジョセフ・スミスがニューヨーク州西部にあった自宅近くの森で祈っているとき、父なる神とイエス・キリストが御姿を現されました。1800年代の始め、アメリカ合衆国では宗教に関するひどい騒ぎがありました。ジョセフの家族はそれぞれ異なる教会に加わっていましたが、ジョセフはどの教会に加わるべきか決めかねていました。ジョセフが14歳のときに、ヤコブの手紙1：5に触発されました。この聖句には次のような約束が記されています。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。」ジョセフは、どの教会に加わるべきかが分かるよう祈り、罪の赦しを乞うことにしました。ジョセフが心の望みを打ち明けると、闇の力に打ち負かされそうになりました。暗い闇が周りに集まってきて、物が言えなくなったのです。ジョセフはあらん限りの力を尽くして神に叫び求めました。ジョセフはその後起こったことをこのように説明しています。「わたしは自分の真上に、太陽の輝きにも勝って輝いている光の柱を見た。そして、その光の柱は次第に降りて来て、光はついにわたしに降り注いだ。そして、その光がわたしの上にとどまったとき、わたしは筆紙に尽くし難い輝きと栄光を持つ二人の御方がわたしの上の空中に立っておられるのを見た。すると、そのうちの御一方がわたしに語りかけ、わたしの名を呼び、別の御方を指して、『これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい。』と言われた。」光が現れた瞬間、ジョセフは自分を縛っていた敵から解放されたのを感じました。それから数日間、ジョセフは大きな喜びと愛を感じました。示現の間に、どの教会が正しいかと尋ねると、どれにも加わってはならないとイエス・キリストは答えられました。主は、当時の教会は「誤った教義を信じており、神がご自分の教会と王国として認めているものはない」と説明されたのです。最初の示現は、この最後の神権時代におけるイエス・キリストの福音の回復の幕開けとなりました。ジョセフ・スミスは末日における主の預言者として選ばれました。時を経て、主はジョセフ・スミスを通してご自分の権能と教会を回復されました。」(モルモン教)皆さん、これがモルモン教の始まりでした。何千年も前の話をしているわけではありません。たった二百年位前にできたその宗教の始まりは、これでした。ジョセフ・スミスという人物の神秘的な特別な体験がすべての始まりだったのです。客観的なみことばの真理に基づくものではありません。ましてやモルモン教は、聖書に加えて、ほかに独自に三つの聖典という物も持っているのです。聖書は十分ではない、と信じている考え方、そんな宗教は、その神学も教理も当然みことばに反した偽りの教えでしかありませんでした。

また神秘主義のこういった影響を受けているものというのは、こういっただれもが知っているような異端だけではなくありません。ある人は思っているかもしれません。そんな大きな異端はそうかもしれないけれど、私たちにはそこまで関係ないんじゃないでしょうか。では一つだけ、ほかにもこんな話があります。「ある大きな教会の牧師が、教会の移転を望んでいました。その考えは信徒の何人かにも不評でしたが、彼は神秘主義に訴えることで、それが神の御心であると説得しました。彼は三度にわたって、主

ご自身が彼に語りかけ、ある場所に教会を移転するよう指示されたと話したのです。牧師は三度目に主がこう言われたと主張しました。『時が来ました。その問題は私に任せなさい。私が多くの人々の心に働きかけよう。理解できない人も中にはいるだろう。従わない人もいるだろう。しかし、ほとんどは従うだろう。行って、私の命令に従いなさい。』牧師はこの計画を会衆に提示したとき、それをカレブとヨシュアが約束の地に入るというイスラエル人への挑戦になぞらえました。そして、こう付け加えたのです。『もし、神の美しい計画を捉えることができないのであれば理解しますが、教会は神の計画に従うこの機会を逃すわけにはいきません。私たちと一緒に行かないのなら、それは理解します。皆さんを悪だとは思いません…私は、私たちが神の計画に向かって進んでいくことを望んでいます。そして、皆さんも一緒に進んで欲しいと思っています。そうすれば、神も祝福してくださるでしょう。』この牧師が何を思っていたのかはわかりません。でも何がおかしかったのでしょうか？それは、彼が聖書に記されているその神のみこころを祈り求めたりするのではなくて、自分自身の主観的な経験や感情を訴えたことにありました。ただ自分の望みに基づいた、それに沿ったみことばを人々に押し付け、そして、信頼することのできない自分自身の感情に基づいた決定を下したのです。それは大きなまちがいでした。危険なものでした。ほかにも例を挙げればきりがありません。でも、ポイントは明白でしょう。客観的な真理より、自分自身の主観的な経験や感情を重視するということはまちがっている、ということです。危険だということです。忘れてはならないのは、モルモン教にしても、今私たちが見たもう一つの例えにしても、どこでこれが起こっています？自分たちが信者であると感じるかのように聖書を使っていたり、教会の中で起こっているのです。私たちの周りにそういったものはあるのです。

では、その中でどうするか？皆さん、私たちは、聖書が語っていることで満足することです。ほかの何かを求めたり、何より自分の感情や経験に重きを置いて明白なみことばを横に置くなんて事はあってはいけない、ということです。私たちに必要なものは、このみことばにすでに与えられました。このみことばを横に置いたら、いったい私たちは何を知るでしょう。でもみことばを重視していなければ、みことばを十分なものだと思っていなければ、自分たちの感情や経験に基づくことになるのです。十分なみことばではなくて、不十分な神秘的な体験を追い求める、それこそが神秘主義のもっていた三つ目の特徴でした。

#### **d) 肉の思いによっていたずらに誇る 18 d 節**

次に四つ目の特徴が18節の終わりに記されていました。「肉の思いによっていたずらに誇り」と。四つ目の特徴、それは「肉の思いによっていたずらに誇る」ということです。これまでの流れからも明らかのように、神秘主義者たちというのはひどく高慢になっていました。彼らは超自然的な自分自身が得た経験や体験や知識というものにうぬぼれていたのです。ここで使われていた「いたずらに誇る」ということばですが、これはおもしろいことばで、もともと「自分を大きく見せる」とか「何かを膨らませる」という意味があります。何かを膨らませるのです。ちょっと想像してみてください。空気がパンパンに入った巨大な風船、どこから見てもわかるようなそんなでっかい巨大な空気が入った風船は確かに人の目を引くようなものでしょう。すごい大きさまで膨らむことができます。でもそれがどこまで大きくなったとしても、その風船の中身は、ただの空気でした。そこに中身はないのです。それと同じように、にせ教師たちは、中身のないものによって膨れ上がっていたのです。彼らは、決して揺るがない確固たる神様や、みことばの上に、自分の土台を築こうとするのではなくて、自分たちの経験や揺らいでしまう知識に立とうとしていました。神様を知るために必要な十分なものはもう与えられているにもかかわらず、それをみずから拒んで、それ以外のものに捕らわれていたのです。見かけはもちろん、謙遜な人のようにふるまっていたでしょう。でも彼らのうちは、まさにプライドであふれていました。そして残念ながら、そんな神様に逆らう彼らの心は、御霊による思いではなく、肉の思いによって支配されていたのです。ローマ8：6-7節にこう書いていました。「6 肉の思いは死であり、御霊による思い

は、いのちと平安です。:7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」こうして肉の思いに支配されていた高慢な神秘主義者たちの関心は、神様にはありませんでした。彼らの関心は、自分にあったのです。神様に従って、そのみことばを、ではなく、神様の栄光を現すことなど全く望まずに、自分自身が称賛されることを願っていました。自分自身がすばらしい特別ないろんな体験をしていることを人々が称えるように願っていました。そのようにして人々の前に膨れ上がっていたのです。神様へのへりくだった謙遜、従順ではなくて、いたずらに誇り高ぶること、そんな中身の無い高慢さこそ、神秘主義のもっていた四つ目の特徴でした。

### e) かしらに結び付くことをしない 19 a 節

そして最後に、神秘主義の五つ目の特徴が19節の初めに記されていました。19節の初めを見てみるとこう記されています。「かしらに堅く結びつくことをしません。」五つ目は「かしらに結びつくことをしない」ということです。ある意味、この最後の特徴がこの主義の問題の根源と言っても過言ではないかもしれません。確かに偽りの謙遜というものも、御使い礼拝というものも、幻にとらわれている、そういったことも大きな過ちでした。でもそれ以上に彼らは、かしら一頭から離れていた、というわけです。教会のかしらとは、だれでしょう？もちろんイエス・キリストのことです。以前私たちが見た、コロサイ1:18にはっきりと書かれていました。「また、御子はそのからだである教会のかしらです。」と。かしらは、キリストでした。でもにせ教師たちは「その頭に、かしらに結びついていませんでした。」と。当たり前のことですが、人のからだから頭を切り離したらどうなるでしょう？当然そのからだはこの先、生きていくことはできません。死んでしまうのです。そしてそれは、私たちキリストのからだとして生きる信仰者にとっても同じでした。かしらに結びついていなければならない。だからこそ、この神秘主義というのは非常に危険なものだったのです。彼らは自分たちがかしらに結びついてないだけではなくて、ほかの人々を誘惑して、かしらから遠ざけようと熱心に働いていました。十分なキリストにではなくて、それ以外の余分な経験や体験に満足を見出すようにと惑わす、それこそが神秘主義のもっていた五つ目の特徴でした。

さて、ここまで、危険な神秘主義への警告と、そして神秘主義の五つの特徴を順に見てきました。パウロがどうしてもはっきりと「神秘主義者に、あなたのほうびをだまし取られてはいけません。」と強く注意していたのかがわかったでしょうか？まちがいにこの教えは、キリストに対する人々の信仰を惑わす危険なものでした。そしてそれは、今も私たちの周りにもあるのです。

### 3) 危険な神秘主義への応答

では、そんな偽りの教えに対して、私たちはどうすればよいのでしょうか？パウロは最後にこのように神秘主義への応答を教えてくださいました。もう一度19節をよく見てください。こう書かれていました。「かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」と。からだ全体が成長し続けていくために必要なことはいったい何でしょう？その答えはシンプルです。ただ成長の源である、かしらであるキリストに結びついていることです。忘れてはいけません。私たちの行いや、私たちの特別な経験や感情が基となってからだ全体が大きく育っていくわけではありません。ただ、かしらであるキリストが基となって大きく育つのです。かつてイエス様もはっきりと言われていました。ヨハネ15:4-5は私たちもよく知っている箇所の一つでしょう。こうあります。「:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」と。枝はどんな枝であろうとも、決してそれ自体で成長していくことも、実を結ぶこともできません。もし、それは信じられませんかと言われ



るのであれば、ぜひ一緒に浜寺公園に行って枝を1本採って帰ってきて、庭に置いてどうなるかを見てみましょう。いくら経ってもそれが成長することはありません。実を結ぶこともありません。枝のいのちも枝の成長も、何にかかっていますか？その枝が木にしっかり結びついているということにすべてかかっているのです。私たちも同じです。私たちのいのちも成長も、いのちの源である木＝キリストと、そのみことばにとどまり続けることにかかっています。イエス・キリストを救い主として受け入れた者たちは、ただ恵みのゆえに信仰によって罪を赦されて、そしてもうすでに皆さん、キリストのうちに入れられました。イエス・キリストを信じている私たちはみな、もうすでに神様の働きによってキリストとともに繋がっているのです。キリストとともに歩んでいるのです。だからこそ、罪を赦された私たちはみなキリストにあって、日々キリストを信じて、そのキリストに信頼して、キリストのことばに忠実に従って歩いていこうとするのです。

偽りの神秘主義者の教えは、今でも変わらずに惑わそうとします。「キリストだけでは不十分ですよ。みことばの教えだけでは失格ですよ。そんなものよりも私たち自身の特別な体験、神秘的な経験、私たちの感情、それこそがすべてです。」と。でも、そんな過ちにだまされないことです。私たちがどう感じてどう思うのか、そんな自分の経験や体験に根拠を置くのではなくて、キリストとそのみことばの権威に拠り頼んで、そしてそこに喜びを見出して歩み続けていくことです。みことばは私たちに繰り返し教え続けてくれていました。「キリストのうちにこそ、知恵と知識との宝がすべて隠されています。」と。キリストにあって私たちは今も満ち満ちているのです。」と。キリストだけが、私たちの救いにおいても、霊的成長においても十分なお方でした。

もしまだ皆さん中に、この十分なキリストを自分の救い主として、主人として知らない方があれば、どうかきょう自分の罪を悔い改めて、そしてこのすばらしい主を信じ受け入れてください。このキリストのうちにのみ、本当の救いが、本当の満足があります。

また、もうすでにこの主を愛し喜んで従っておられる皆さん、続けていつも十分なそのキリストに、いつも完全に権威あるそのみことばに立って、歩み続けていきましょう。私たちに必要なものは、もうすでにここに与えられています。私たちがこのみことばを読むのに必要な助けも神様は与えてくださっています。そこに立ち続けることです。私たちの目を逸らそうとする嘘や偽りは数多く存在しています。でも、どんな時代でも変わることはないその真理である主とそのみことばに立ち続けていくことです。この方を愛して、この方の栄光を現す者として、ともに歩み続けていきましょう。